

(別紙2) 受領番号:

提出日付: 令和 8年 2月10日

モニター評価報告書

1. タイトル

身体感覚に作用する支援機器の活用による知的・精神障害者の就労支援体制の構築

2. 報告書の作成者

所属・部署	氏名
ラックヘルスケア株式会社	渡部 昇
連絡先(住所、電話、メールアドレス)	
〒102-0093 東京都千代田区平河町 1-3-13 CIRCLES 平河町 3F	
TEL: 03-6261-8993	
Mail: watanabe-n@lac-hc.co.jp	

3. 製品概要

① カテゴリ	ISO 9999: 05 18 21 Assistive products for training in sensory integration
② 製品名	(1) ソファ: 「センシット」 (2) 座布団/ひざ掛け: 2-1. 「ボールクッション バックルタイプ」、2-2. 「ニードミー」 (3) ベスト/ひざ掛け: 3-1. 「マイフィット」、3-2. 「ニードミー」
③ 型番	(1) ソファ: SKU 39587653 (2) 座布団/ひざ掛け: 2-1. SKU 39587018 / 2-2. SKU 39587301 (3) ベスト/ひざ掛け: 3-1. SKU 39587613 / 3-2. SKU 39587051
④ 製品コード	TAIS コードなし
④ 希望小売価格	(1) ソファ: 539,000 円 (2) 座布団/ひざ掛け: 2-1. 30,800 円 / 2-2. 107,800 円 (3) ベスト/ひざ掛け: 3-1. 90,200 円 / 3-2. 107,800 円
機器の特徴	
⑥ 主な対象者	発達障害を伴う知的障害により、過集中や注意散漫になりやすく、適切に休憩を取ることが難しい方。鬱などの精神障害による意欲・判断力の低下により、周囲への遠慮や休むことへの罪悪感が強い方。 ※調査対象者の禁忌には、心疾患・肺疾患のある方、素材に対するアレルギーのある方を想定。
⑦ 利用場面	休憩時間に、休息場所へ行き、機器を活用して心身を休ませる。(場所や機器による構造化並びに休憩行動のルーティン化を図る)
⑧ 目的	発達障害を含む知的障害や精神障害のある方は、障害特性により理由はさまざまあるものの、共通してセルフケアやセルフモニタリングが苦手なことが多く、疲れていることに気付けない、「まだ大丈夫」と思い込みやすい傾向がある。また、ルールの曖昧さが苦手なことで休憩時間をどのように過ご

せばいいのか戸惑い、支援員に支援を求める場面も散見される。このような不十分な状態での休息は、業務効率の低下や疲労蓄積による欠勤及び離職に繋がる可能性がある。

本モニター評価では、感覚統合支援機器を用いて休憩スペース並びに休憩時間を設定し(活動の構造化)、休憩時の行動のルーティン化を図る。同時に、現場の支援者の理解及び環境調整方法を指導し、有益な休息に関する周囲の理解を深めるといったソフト面からの就労環境調整を実践する。

本実証で対象とする身体感覚に作用する支援機器(以下、感覚統合支援機器)は、固有受容覚などの感覚への刺激が他の人と比較して不足する傾向にある方に対し、適切な刺激を適切なタイミングで与える機器である。今回対象とする座姿勢時に活用できる3種の製品は、共通して特殊なプラスチックボールを使用している。そのボールの重さと触感による身体への刺激が落ち着きをもたらし、作業に集中し効率をあげ、十分な休息に充てるための環境づくりを支援することが期待される。

現在、販売している製品は、就労の休憩場面での活用が見込まれるものの、その知見や実績は乏しく、実際に就労場面で使用することあたっての効果及び機器の使い勝手の検証を行う必要がある。表1に、本評価で使用した感覚統合支援機器を示す。

表1. 選定対象とする感覚統合支援機器

no.	製品名	製品概要
1	ソファ「センシット」 	プラスチックボールが座面、背中、腕部分に詰め込まれたソファ <ul style="list-style-type: none"> ・ サイズ :高さ 78 cm x 直径 90cm ・ 重量 :約 22 kg
2	「ボールクッション バックルタイプ」 	椅子に取り付けて利用できるプラスチックボールが入った座布団 <ul style="list-style-type: none"> ・ サイズ :40cmx40cm ・ 重量:約 550g
3	「ニードミー 通常タイプ」 	落ち着いて座ることを支援するプラスチックボールが入ったひざ掛け <ul style="list-style-type: none"> ・ サイズ: 65cmx42 cm ・ 重量:3.2kg
4	「マイフィット」 	身体にフィットさせることで、プラスチックボールが適切な刺激を与えるベスト

⑨利用安全の対策 (リスクアセスメント)

CE マーク取得 (EU 2017/745 に準拠)

4. 評価結果 ※応募は予定で差支えありません

① 実施機関	生活クラブ風の村	
⑤ 実施期間	令和7年11月25日 ~ 令和8年1月30日（左記期間の内、2週間~4週間/人）	
③ 評価に係った職種等	作業療法士、支援機器デザイナー、支援機器営業職	
④ 評価結果	(1) 対象者	利用者：鬱などの精神障害による意欲・判断力の低下により、周囲への遠慮や休むことへの罪悪感が強い方。 支援者：対象者の就労を日常的に支援する者（事業所の管理責任者）
	(2) 人数	利用者：2名(各事業所1名) 支援者：2名(各事業所1名)

(3) 手法

1) 研究デザインと対象者

本モニター評価は、事業実施期間が限られていることから、ケーススタディとして2事例に取組んだ。探索的アプローチによるフォーカス・グループに対する質的記述的研究デザインとした。対象となる利用者が選択した支援機器の介入前後における機器の利用効果を質問紙およびインタビューにより評価した。介入にあたっては、支援者を対象とした機器の講習の後、利用者による15分程度の試用を経て、各利用者に適した機器と使用場面を選定した。その後3週間～4週間の介入評価を実施した。介入前後に、利用者と支援者に対して質問紙およびインタビューによる評価を実施した。

対象者は、利用者である精神障害者2名およびその支援者2名とし、感覚統合支援機器の利用効果を評価した。表2に対象とするグループと構成を示す。対象者には、研究開始時に調査および倫理事項に関する説明を行い、研究参加の同意を書面にて得た。

表2 対象者の概要

ケース1	利用者A	30代 女性 / メンタル不調・腰痛 生活指導員
	支援者A	40代 女性 管理者
ケース2	利用者B	20代 女性 / 精神障害 事務職
	支援者B	50代 女性 管理者

2) インタビューとデータの取得方法

インタビューの実施場所は、参加者の勤務先で、プライバシーに配慮した個室で実施した。調査前に、対象者の年齢、性別、職種経験歴を質問紙により収集した。その後、2名のインタビュアーのもと、1回あたり30～60分の予定で事前に作成したインタビューガイドに従い、半構造化した以下の4つの質問項目に沿ってインタビューを実施した。

1) 利用者の最近の疲労感

多次元疲労インベントリ(MFI-20)のスコア

2) 利用者の最近の業務の実行状況(頻度・質・満足度)

AMPS (Assessment of Motor and Process Skill) の視点を用いたインタビュー

3) 利用者の支援機器の試用による行動や感情の変化

AAD (Assessment of Awareness of Disability) の視点を用いたインタビュー

4) 支援機器使い勝手および機器に対する要望

インタビューは、ICレコーダーに記録した。データ収集は、2025年12月～2026年1月にかけて合計4回実施した。ICレコーダーに録音された音声データは逐語に書き起こした。テキストデータに含まれる氏名等の個人情報には匿名化処理を実施した。

3) 分析の概略

分析方法は、要約的内容分析を採用した。逐語録をデータとし、採取した4回分のデータ毎に質的内容分析を行い、4つの質問項目毎に逐語録を精読し、それぞれ重要な表現と内容の抽出を行った。

4) 倫理的配慮

本評価は、東京理科大学倫理審査委員会の承認のもと実施した。(承認番号25063)

(4) 結果

本モニター評価により、以下の2事例を得た。

(1) ケース1

1) 利用者Aの困りごと

3~4年前からメンタル不調がある。また、腰痛などの身体的な不調も感じており、月に2~3日欠勤がある。周囲に気を遣う性格で、業務開始直後の職員からの質問対応でエネルギーを消耗した状態で1日が始まる。昼休憩には、食事よりも眠ることを優先している。1人の時間を確保できる自分の車内でシートを倒して40分ほど仮眠をとる。しかし、起きた時に体が痛い、だるいと感じることが多いなど、仮眠の質が悪くリフレッシュできていない。(図3)

2) 結果

4週間の間、昼休憩および事務作業時に感覚統合支援機器を使用した。

- 昼休憩時：ソファ、ひざかけ
- 事務作業時：ひざかけ、ボールクッション

昼食後に、ソファで40-50分の仮眠を週3日程度とった。仮眠の際は、ソファに付属の肩掛けで上半身を包み、オットマンにのせた足の上にひざかけをかけることで、より包まれる感覚を得られる工夫を自ら行った。昼の休憩時にしっかり休めるようになったことで、午後の業務に集中できるようになった。1~2時間程度のデスクワーク時には、事務椅子にクッションを置き、ひざかけをかけて作業を行うことで、落ち着いて業務に取り組めるようになった。(図3)

MFI-20の結果、利用者の活動性の低下、動機づけ般的疲労感や精神的疲労感、活動と動機づけの低下および精神的疲労感に改善傾向があった。(図4)

副次的な結果として腰痛が軽減されたことも、冷静な作業につながったと考えられる。

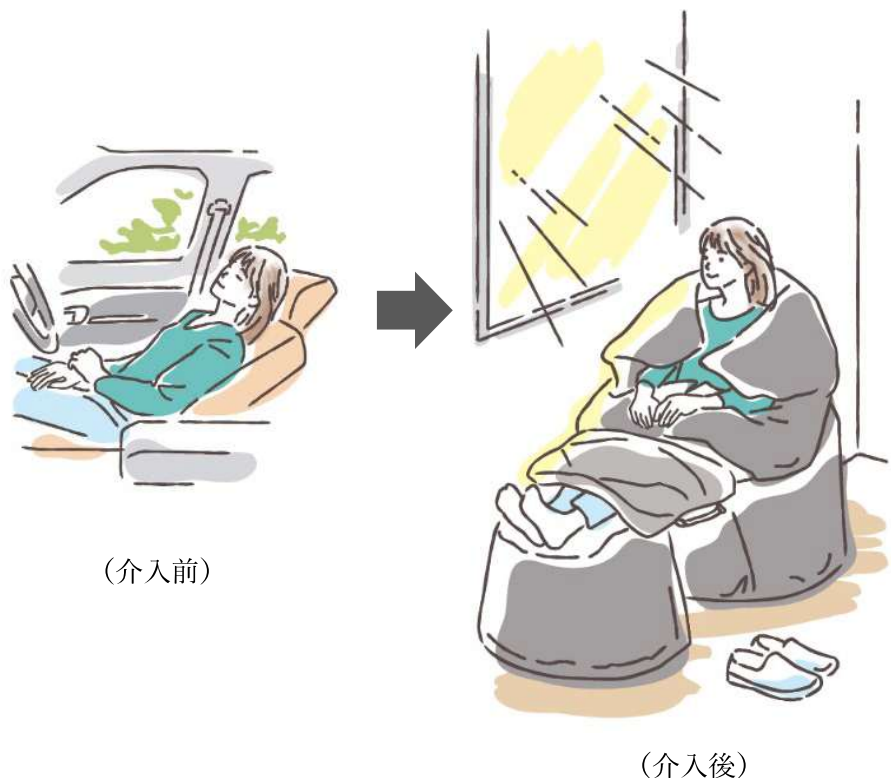


図3. 介入前後の昼休憩の様子

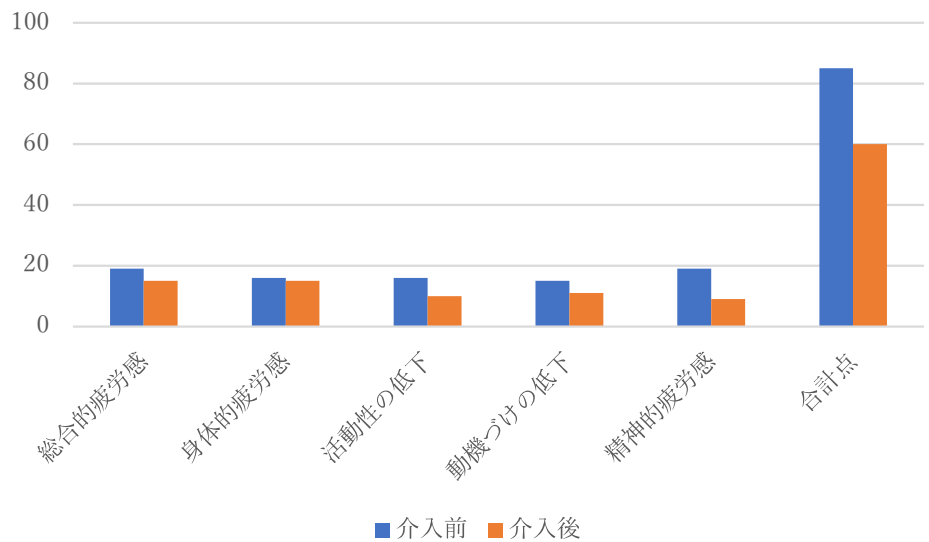


図4. MFI-20 の介入前後比較（利用者 A）

（2）ケース2

1) 利用者 B の困りごと

日頃の困りごと：周囲の視線や会話に恐怖感や緊張を感じやすい。責任感を持って仕事に取り組みたい気持ちがあるが、息抜きの仕方やタイミングがわからず悩んでいる。朝、体調不良で起きられない、だるさから出勤できなくなることが月1～2回ある。

昼休憩には、自分の気持ちを一旦リセットするために、自分の車でシートを倒し、体に厚手の毛布をかけて仮眠をとる。午前中に気持ちが沈むことがあると、昼休憩時にも緊張が収まらず、十分休めないと感じることがある。（図5）

2) 結果

3週間の間、昼休憩および事務作業時に感覚統合支援機器を使用した。

- 昼休憩時：相談室の一隅でソファを使用。
- 事務作業時：事務所の自席でひざかけ、ボールクッションを使用。

昼食後に、ソファでアイマスクを着用し、30分の仮眠を週3～4日程度とった。ソファの使用感は大変よかったが、仮眠中に同僚が部屋のドアを開けてしまい、緊張することがあり、落ち着かなかった。また、普段から首にネックウォーマーと少しきつめの上着を身に付けたりと工夫をしている。今回の評価では、業務中に動悸や発作が起きた際、ベストを着用し、ひざ掛けのポケットに腕を入れ、体をかがめて防御する姿勢をとることで気持ちを落ち着かせた。次の業務に取り掛かるための気持ちを整えることに役立った。（図6）

MFI-20の結果、利用者の身体的疲労感に改善傾向がみられたが、活動性の低下、動機づけ般的疲労感や精神的疲労感は増加傾向がみられた。（図7）



図 5. 介入前の昼休憩の様子



図 6. 介入時の事務所での
機器利用の様子

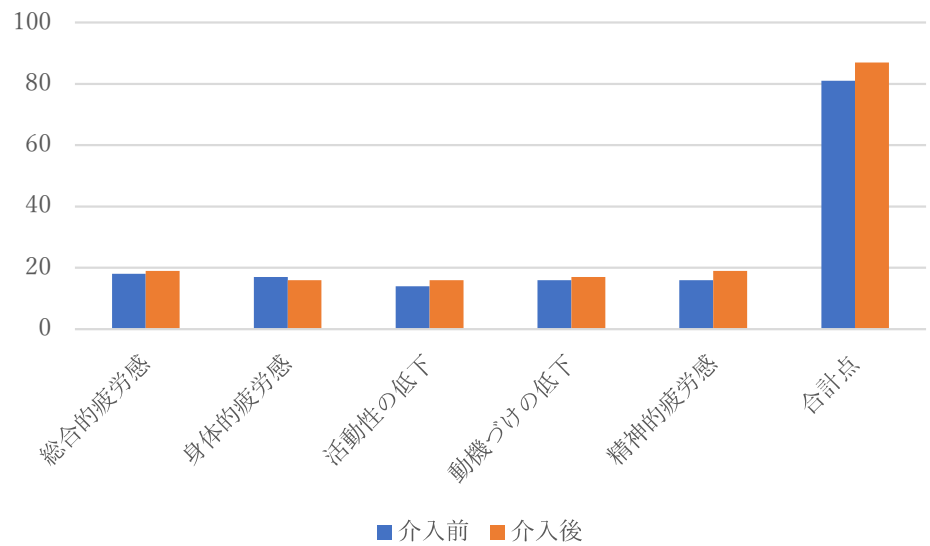


図 7. MFI-20 の介入前後比較 (利用者 B)

⑥ モニター評価から得られた効果

本モニター評価で実施した2つのケーススタディから、以下の効果が得られた。

1) 昼休憩時の利用による疲労感の軽減

利用者の疲労感の変化について、多次元疲労インベントリ(MFI-20)のスコアを分析した。ケース1では、介入後に、利用者の活動性の低下、動機づけ般的疲労感や精神的疲労感、活動と動機づけの低下および精神的疲労感に改善傾向がみられたが、ケース2では、利用者の身体的疲労感に改善傾向がみられたが、活動性の低下、動機づけ、一般的疲労感や精神的疲労感が増加傾向がみられた。2事例とも、介入前は昼休憩時に一人でゆっくりできる場所として、自分の車でシートを倒して仮眠をとって休憩をしていた。介入時には、ケース1においては、人の出入りが多くない、ある程度の広さのある共有スペースにソファを設置したが、ケース2では、3~4畳程度の相談室の一隅にソファを設置した。人の出入りも多い場所に面しており、休まらなかった様子が見られた。感覚統合支援機器は、就労の場における適切な休憩をとるための有用な支援方法のひとつとなりうる一方で、これらの機器がその性能を発揮し、利用者が適切な休憩をとれるようにするためには、単に機器を導入するだけではなく、機器を一人で安心してゆっくり落ち着ける環境に設置する、機器を利用することに対する周囲の人々の理解を得ることの必要性が示された。

2) 業務遂行の質の向上

利用者の作業遂行の質と作業遂行能力の変化をみるため、インタビュー結果をAMPS (Assessment of Motor and Process Skill) の視点を用いて確認した。

介入前インタビューで2事例とも、「適切に物を使ったり、順序よく作業を進めたり、問題が起こったときに対応する」に課題があると話した。ケース1においては、利用者は介入後に「手や足をバタバタさせてしまう」「立ち上がるのが減った」と語り、課題に集中できずに余計な動きが出るのが減り、業務取り組みの効率が上がったと語った。機器の活用により、①疲れずに課題を行うこと、②速すぎたり遅すぎたりしないこと、③課題以外のことに注意が添えないこと、④課題の完了までやり遂げることに於いて変化がみられた。

3) 業務時の気持ちの切り替えの支援

さらに、作業遂行能力に対する本人の自己認識を評価するために、インタビュー結果をAAD (Assessment of Awareness of Disability) の視点を用いて確認した。

その結果、利用者と支援者の間で、認識のずれは無く、ケース自身も自己の不得意について理解していた。時には支援者よりも具体的に、自分の課題(利用者さんへの仕事の指示出しのタイミングが遅くなりがち等)を詳しく語っていた。ただし、次にどのように改善していくか修正戦略のアイデアが不足していた。また、「〇〇について支援者や同僚へ相談する必要がある」と考えていながらも、それできていない実態があることを語った。利用者自身が大切にしている業務、もっとうまくやりたいと思っている業務について、介入前後で明確な変化は出ていないが、本評価で使用した感覚統合支援機器の使用は、修正戦略(気持ちを切り替える時に意図的に使った、ひざ掛けの重さで足をバタバタしなくて済んだ、など)の1つの手段になったと言える。

両ケースとも、現状よりもよりよく業務が進められることを望んでいたが、今までの自己対処ではうまくいかず、気持ちが落ち込むことがしばしばあると語った。その環境調整を検討する上で、感覚統合支援機器の使用は新たな解決方法の一助になる可能性があると考えられる。

⑦ 期間中に発生した事故・ヒヤリハット

特になし

⑧ 期間中に発生した機器等の不具合や故障、修理や調整等

特になし

⑨ 所感（使用にあたっての意見・感想）※モニター実施機関コメント

（１）利用者の声

- ・ソファに座った際、周りから包まれる感覚がとても安心感がありました。「やっぱり休めてる」というのは実感しています。午後あくびを噛み殺して必死に仕事をするとはなくなりました。
- ・不眠だった翌日や、動悸や発作時にベストとひざ掛けを使って、次の業務に取りかかるための気持ちを整えることができました。ほどよい圧迫感と安心感で「守られている」ような感覚がありました。

（２）支援者の声

- ・毎月、必ず腰痛等の痛みによる休みがありましたが、ソファを使うと欠勤はありませんでした。また、落ち着いて仕事できていました。
- ・座布団とひざ掛けは、座姿勢の維持ができ、肩や背中中の疲労度が軽減されているように感じました。
- ・機器を使う工夫を、自ら試行錯誤していました。コミュニケーションに苦手意識を持っていますが、業務量に対する自分のキャパシティを意識して、仕事の負担や分担を上司に自ら相談するようになりました。

5.モニター評価後の特記事項・連絡事項

--